うへの火とりは、ゆするつきにをきかへて、はしにをきたるもあしからず、

〔類聚雜要抄三節雜事〕一調度○略中　泔坏一具

〔玉海〕元暦元年十一月廿二日丁未、大將五節裝束已下饗祿等注文、○略中

一調度　二階　泔坏在臺

泔器雜載

〔源氏物語三十若菜四〕正月廿三日子の日なるに、左大將殿○髯黑の北方、わかなまいり給、かねてけしきももらし給はで、いといたく忍びておぼしまうけたりければ、にはかにてえいさめかへしきこえ給はず、玄のびたれど、さばかりの御いきほひなれば、わたり給ふ儀式などいとひゝきこと也、みなみのおとゞの西のはなちいでに、おましよそふ、○略中御ぢしき四十まい、御しとね、けうそくなどすべてその御ぐども、いときよらにせさせ給へり、らてんのみづしふたよろひに、御衣ばこよつすへて、夏冬の御さうぞく、かうご、くすりのはこ、御すゞりゆするつき、かゝげのはこなどやうの物、うち〳〵きよらをつくし給へり、

〔蜻蛉日記上之下〕五六日ばかりになりぬるに、おともせず、れいならぬほどになりぬれば、あなものぐるほし、たはぶれごとにこそわれはおもひしか、はかなきなかなれば、かくてやむやうもありなんかしとおもへば、心ぼそうてながむるほどに、いで玄日つかひしゆするつきのみづは、さながらありけり、うへにちりゐてあり、かくまでとあさましう、

たへぬるかかけだにあらばとふべきをかたみのみづはみくさゐにけり、などおもひしひしも見えたり、れいのことにてやみにけり、

髮水入

〔類聚名物考調度十〕粉水　けさうみづ　粧裝水

けさう水、或は髮水とて、それ入る器を俗には髮水入ともいふ、これ古への泔盃なり、

〔嬉遊笑覽一下容儀〕びなんかづらを水に漬て用る器、髮水入といふ、塗物も金物もあり、形圓扁なり、難